
赤いチューリップの約束

ari sa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤いチューリップの約束

【Nコード】

N0331G

【作者名】

a r i s a

【あらすじ】

学校の花壇でチューリップを育てる少女有紀に出会って歩は赤いチューリップの約束を知る。

歩は、煉瓦に囲まれた花壇の前で足を止めた。

そこには色とりどりのチューリップが花を咲かせていた。

よく目を凝らすと、花壇の向こうに普段は運動部が顔や足を洗った
り夏には水を飲んだりする古びた水道の蛇口からジヨウロに水を汲
み取っている女子の姿が見えた。

園芸部員？

そんなのあつたっけ…？

ジヨウロが一杯になったのだろうか、女子が駆けてきた。

顔いっぱいに笑みを浮かべている。

そして女子が歩に気が付いた。

「あれ、珍しいなあ。君もお花好き？」

そう聞きながらも答えは求めていないらしくチューリップに水をか
けていく。

「あの…この学校、園芸部なんてありましたっけ？」気になって仕
方なかったので歩が聞いた。

女子は寂しそうに、

「園芸部かあ…昔はあつたらしいんだけどね、今じゃ廃部になつち
やつて花壇がそのまんまになってたから、まあボランティアみたい
な物よね」

ということはこの女子は好きでやつてるのだ。

歩には到底真似出来そうに無かった。

歩はクラスのギャル系女子に合わせて少ないお小遣いからファッシ
ョン雑誌を買い集めたり興味も無いドラマや好きでも無いアイドル
のライブに出掛けたりしているのに対し、この女子は周りに合わせ
たりなんてせずにただ自分の好きな事をしている。

歩は尊敬に近いものを感じた。

「あ、そう言えば名前を聞いてなかったわね。私は有紀よ。東村有

紀

「あ、和泉歩です」

イズミアユム…。

有紀は口の中で呟いた。

「歩ちゃんね。またお花を見に来てくれる？」

歩は、知らず知らずの内に頷いていた。

「はい…」

次の朝も登校途中に花壇を覗いた。

有紀は居なかつたが、チューリップは昨日と同じ様に風に揺れていた。

「あれ？」

赤いチューリップがない。

チューリップを描けと言われれば大体の人が赤く塗るだろう。

それほどチューリップの定番色なのだ、赤色は。

「あ！歩ちゃん！」

有紀が通学鞆を肩に掛けて言った。

「有紀さん。……あの」

歩は有紀に聞いた。

どうして赤いチューリップが無いのか。

「ああ…私、赤色って好きじゃないのよねー。」

そっかあ。

歩は納得した。

有紀が更に続けた。

「約束の色だから」

有紀は一年前から、近所の優美と仲良しだった。

ある日、優美が有紀に言った。

「ねーねー、有紀ちゃん。あたし達親友だよね？」

有紀は間髪を入れずに頷いた。

「うん！親友だよっ」

「そう？じゃあさ……」

優美がある話を始めた。

A子とB美はとっても仲良しだった。

二人は家庭の事情で離れ離れになってしまった。

その時、二人は庭に咲いていたチューリップを三十輪ずつ部屋に飾った。

すると、暫く経ってA子が交通事故で死んでしまった。

するとその日からB美の部屋のチューリップが毎日一輪ずつ赤く染まって行った。

そして、三十日後……。

B美の部屋のチューリップは全て赤く染まっていた。そしてB美は死んだ。

「ね？だから、B美はA子と一緒に死んだのよ」

優美は、だから私達もしようよ、と言った。

有紀も反対はしなかった。そして有紀は学校の花壇に三十輪のチューリップを植えた。その後優美は遠くの学校に引っ越して行った。

「だから、赤いチューリップは植えちゃ駄目なのよ。優美と一緒に天国行けなくなるからね」

あつ……と、ホームルーム始まっちゃう。

有紀はそういつて逃げるように走って行った。

歩もさっきの話を頭の中にフルポリュームで流しながら教室へ向かった。

放課後、花壇へ行くと有紀が煉瓦の淵に膝を抱えて座っていた。

「有紀さん」

歩が声を掛けると有紀が顔を上げた。

「あ……」

声を掛けなければ良かった、と後悔する。

有紀の目は真つ赤だった。つまり泣いていた事を意味する。

「グス……歩ちゃん……これ見て……」

有紀の指が示す方向に目を向けると、一輪の赤いチューリップ……。

「優美……グスン」

つまり優美が死んだと言う事だ。

「有紀さん……」

三十日後には有紀も死んでしまおうと言う事だ。

「ふう……泣いたら落ち着いたわ」

有紀はゴシゴシと目を擦って涙を拭いた。

「ねえ、歩ちゃん。せつかく来てくれたんだけど私帰らなくちゃ」

有紀が地面に放り投げてあった鞆を取り上げた。

「バイバイ」

歩もサヨナラ、と言って有紀を見送った。

次の日の朝、花壇に行っても有紀は居なかった。

赤いチューリップは二輪に増えている。

その日から、有紀は来なくなった。

毎日一輪赤いチューリップが増えていく。
やがて一輪の白いチューリップだけを残して全てのチューリップが
血のような赤色に染まった。
歩は、怖かった。
二十九輪の赤いチューリップが。
明日有紀は死んでしまう。

いよいよ赤いチューリップが三十輪になった日、有紀は久しぶりに
花壇に顔を出した。

「歩ちゃんに伝えたい事があってね」

真っ赤な花壇を横目に、有紀が寂しそうに呟く。

歩は何も言えなかった。

「私は今日死ななきゃならないの」

わかっていた。

わかっていただけ……。

歩の目から涙が溢れた。

「悲しまないで。でね、歩ちゃんにお願いがあるの」

歩は有紀の願いを快く受け入れた。

「有難う。……それから、バイバイ」

「ハイ……サヨナラ」

歩は溢れる涙を止められずに教室へ戻る事が出来なかった。

花壇は血のような深い赤。歩は滲んだそれに手を合わせた。

その次の瞬間、

ドサツ、と花壇に何かが落ちた。

その『何か』を確かめた瞬間、歩の口から悲鳴が漏れた。

「キヤーーーーーー」

『何か』は有紀だった。

赤いチューリップは有紀の血に塗れていたので警察に切り取られて
持つて行かれてしまった。

歩はその後にマリーゴールドを植えた。

有紀と優美に向けて。

『マリーゴールド…花言葉、友情。』

有紀のお願い、それは、

「花壇に美しい花がいつも咲いてる様にして」

…だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0331g/>

赤いチューリップの約束

2010年10月28日07時52分発行